

『白露』論-男君の「心」に着目して-

著者	高橋 早苗
雑誌名	日本文芸論叢
巻	21
ページ	1-12
発行年	2012-03-31
URL	http://hdl.handle.net/10097/55037

『白露』論——男君の「心」に着目して——

高橋 早苗

はじめに

『白露』は、一九六七年に新出資料として紹介されるまで書名すら伝わっていなかった作者未詳の作品である。一九八種の物語名を伝える『風葉和歌集』（一二七一年）にその名を見出せないことから、それ以後に完成したとして、鎌倉後期から室町初期ごろの成立という見解が示されている^①。伝本は早稲田大学図書館蔵本の一本のみで、二巻一冊から成る。物語本文に統いて「寛永十六年三月日」、「しら露下終」、「為嫁女書之送者也／北村久助生年／十六歳」の識語があり、その末に「白露之系図」が付されている。『北村久助』は、江戸前期の古典学者・俳人として著名な北村季吟（一六二四—一七〇五年）のことであると考えられ、この伝本は、『十六歳』の若き季吟が書写したものとす^②。識語の配置関係から季吟の書写本を第三者がさらに書き写したものとす^③。説がある。この物語は、作品中に『竹取物語』や『伊勢物語』、『住吉物語』などの名を出しており、また『源氏物語』・『狭衣物語』・『住吉物語』などの影響下にあるという指摘がなされている。和歌も多く踏まえており、『王朝和歌や平安時代物語の伝統の中でつちかわれてき

た優美な言葉つかいをふんだんに取り入れ^④た作品であると言われる。こうした特徴とあわせて従来注目されてきたのは、母亡き姫君には継母がいるということ、男君が白露の姫君を自分の実妹^⑤と思い込んで苦悩するということである。

本論では、この二点について改めて検討を加えるとともに、男君の言動に注目することで、新たに『白露』という作品の特質の一端を明らかにしたい。

一、継子いじめと兄妹懸想

『白露』では、中納言の子息である侍従と大納言の娘である白露の姫君の恋物語が展開するなかで、姫君が母を亡くしていること、彼女には継母がいることが語り出されていく。しかし、たとえば作品中にその名が登場する『住吉物語』に見られるような、継母が継子の姫君と自分の娘とを取り違えて男君と結婚させたり、齢七〇の主計頭に継子を盗ませようとするといった、奸計をめぐらして二人の仲を引き裂こうとする継母の姿が描かれることはない。

そのため姫君に継母がいるという、いわゆる継子ものの要素を持ちながらも、『白露』において継子いじめは「きわめて表面的な描写」で「副次的なもの」であるという指摘がなされている。確かに、二人の仲を妨げんとする継母の暗躍が語られることはなく、その点において継子ものという要素は副次的だと言えるのだが、そのうえで本論で注目したいのは、登場人物たちがくり返し継母について言及している点である。

「彼大納言の北方」(364・一六九頁)⁽¹⁹⁾として登場していた彼女が姫君の継母であることが明示されるのは、男君が初めて姫君のもとに忍び込んだ日の翌朝である。男君が出て行ったあと、白露の姫君は継母の思惑を氣にかけずにはいられない。

うへに、若かうやうのかたはしをだにほのめかす人もあらんに、いか斗つらきめを見んと、さしもあるまじき事さへ取あつめ思しつゞけて、物の隙／＼よりさし入朝日影だに、なまはしたなう、空おそろしき心ちし給ふに、いとや、ましうて、おき出ん共おぼされず。(376・一七八頁)

男君との仲を「うへ」に少しでもほのめかす人がいたら、どんなに「つらきめ」を見ることになるだろう、と姫君は思い悩む。物語は「さしもあるまじき事」と即座に継母による迫害を否定する一方で、姫君が悩み続けるあまり、差し込む朝の日の光にすら「空おそろしき心ちし」たことを語り出している。このうち、男君を待ちながら姫君が様々に思いをめぐらす場面にも、「北方も傳へ知しめさばや。いかなるうきめにさするひなん」(386・一八六頁)、継母に知られたらどんな「うきめ」にあうだろうか、という不安と

心配を抱える姿が描かれる。そしてまた父君が亡くなった際にも、姫君は悲しみに惑乱するなかで「此ま、母の御もてなしも、如何様にかは」(408・二〇四頁)と、今後の継母の反応を思うのである。つまり、彼女は男君との契りや父君の死といった出来事が起きるたびに、継子である自分は継母によって苦しめられ辛い思いをすることにしているのではないかと予感し、恐れおののくのである。同様の思いは男君にも見いだせる。

角忍び／＼ならぬ御なからひにて、見奉り給はんとて、何かはつきなくあるべきなれど、北の方の御心さがなくおはしまして、我姫君をのみ先思ふ様にかしづきすへんの御心あれば、(略)おのづから角うちつゝまれて、あいなき御心どもを、たがひにくだき給へる成けり。(391・一九〇頁)

結ばれたのちは、「御心のさがな」き継母に二人の関係を知られないよう、姫君と男君は「たがひに」苦心する。男君もまた継母による迫害を憂慮しつつ行動しているものであり、その後も彼は「北の方の聞おぼさん事もいかゞ」(440・二三三頁)といった懸念を抱いている。さらにこうした心配は、姫君に仕える侍女の杉子にも見られる。

「父君の御心ばへは、たぐひなけれど、まゝ母のきみの情なう隔て思しける御気色成を、すべて万の事女の御心にこそ順ひ間ゆる物なめれ。終には如何様に無端もてなされ給ふらん事」と、行末覚束なく、心ぼそくて、よとゝにもにめもあはでぞ思ひつゞけ、。(378・379・一八〇頁)

継母に知られてしまったらと悩み嘆く姫君の傍らで、杉子は姫

君の故母上が生きていたらと思う。そしてまた「まゝ、母の君」が姫君に対してなんの情愛もなく、思い隔てる様子を見せていることを心配する。姫君に向けた父君の愛情は並々ならぬものではあるが、結局は継母に従うはずであり、となると姫君は、やがてはどんなに「無端^{ムダ}もてなされ」ることになるのだろうか、その「行末」を思うのであり、心細さのあまり夜も眠れない姿が描き出されている。

このように主要登場人物たちは、継母が姫君をやがては迫害するのではないか、という不安に駆られて恐れおののきながら行動しているのであり、換言すれば、自分たちを継子いじめの物語のような展開を体験しうる立場にあるものとして捉えているということだろう。それがより明瞭にうかがえるのが次のような杉子の発言である。

「主斗頭が住よしの君をおかし奉らんとせしやうに、うるさききはあはてまどはんより、何斗の恥なき此方に思した、ましかば、よろしくこそ」と聞え奉れば（下略）。

（412・二〇七頁）

父君の死後、杉子が姫君に志賀行きを勧める場面である。男君とのこれ以上の関係を期待できない今、肩身の狭い状態で暮らすよりは志賀に移り住んだほうが良いと提案する杉子は、「主斗頭が住よしの君をおかし奉らんとせしやうに」と『住吉物語』の継子「住よしの君」に及んだ危険を口にする。彼女が継母の奸計に陥るのを避けるべく住吉の地へ移ったように、自分たちも志賀へと移住しようと言うのである。こうした発言は、まさに『住吉物語』に

代表されるような継母による継子の迫害の物語が、登場人物たちにとって自分たちの現実と重なりうるものとして認識されているということの表れだと言えよう。

類似したあり方は、男君が自分は実妹と関係をもってしまったと思ひ込み、苦悩するという出来事にもうかがえる。兄が妹に恋するという話は、『宇津保物語』の仲澄とあて宮や『源氏物語』の柏木と玉鬘の関係などにも見られることから、従来、こうした兄妹懸想の物語の系譜に『白露』は連なること、また誤解という点に「新たな趣向」が見出せるという指摘がなされている¹⁾。兄妹で結ばれてしまったというのはあくまで彼の誤解であることを、物語が早々に読者に種明かしすることによって、苦悩する男君の滑稽さや幼さが際立つとともに、その誤解はいかにして解けるのか、二人の関係はどのようなものか、といった展開への関心呼び起こすことになる。このように『白露』という作品における「新たな趣向」の役割は大きいのだが、そのうえで看過しがたいのは、男君が苦悩する際に先行する文学作品と引き比べながら我が身の上を嘆いていることである。

天の浮橋の下にてみとのまぐはひまし／＼し夫は、神代の事なれば、なずらへぬべきかたもなし。近き世の業平が、「ねよげに見ゆる」とあさへしをさへ、にくき事のつまにはするを、我はいかなる名をとらん。

（393・一九二頁）

彼は、『古事記』『日本書紀』に見られる「神代」の伊邪那岐と伊邪那美の兄妹の婚姻を思い起こし、また『伊勢物語』において妹にたわむれていた「近き世の業平」の名を出しながら、「我は

いかなる名をとらん」と思い悩む。「神代」「近き世」を振り返り、「我は」とたどりつく男君の思考のありようからは、これまでに紡がれてきた兄妹懸想の物語の系譜に自分を位置づけていることがうかがえる。彼は、自分と姫君との関係を物語世界と重ねながら、その後の自分のあり方を憂慮するのであり、こうした男君の姿は、先述した姫君たちの姿勢に繋がりのあると言えよう。

むろん、登場人物たちが、どんなに先行する物語を自分たちの世界にひきつけて思い悩み、行動しようとも、彼らが懸念するような事態が起きることはない。先ほどの杉子の発言に戻れば、「何斗の恥なき」うちにと移住をうながす杉子の言葉は、逆に今現在には「何斗の恥」もなく、「住よしの君」のように継母によって窮地に追い込まれてはいない状態であることを示しており、実際姫君は、継母の行動による「うきめ」「つらきめ」には遭っていない。その後継母が二人の仲を聞きつけ、引き裂こうと策略をめぐらすことはなく、そしてまた男君が実妹と関係を持ったとして、その浮名が世に広まることもない。つまるところ主要登場人物達は、起きることのない事態を恐れ、起きていないことを苦悩し嘆くのであり、このように彼らが先行する物語を内面化するありようこそ、この物語の一つの特質であると言えよう。

一方で、物語自体は、その当初から「さしもあるまじき事」(376・一七八頁)と継子いじめのあるはずもないことを示唆し、また姫君が実妹だというのはあくまで男君の誤解であることを早々に明かしている。継子ものや兄妹懸想といった先行物語を織り込み、登場人物それぞれに不安や恐れをくり返し抱かせながらも、

それ以上は追究することのない作品として『白露』はあると言つてよい。それでは、この物語が新たに描き照らし出そうとしたものとは何だったのだろうか。以下考察していきたい。

二、男君の「心」

姫君が、継子として継母の迫害を避けるべく志賀移住しようとしていたことは、先に確認したが、注目したいのは、移住の原因としてあわせて男君の薄情さがあげられている点である。

「かう／＼なん思ひよりしを、かく数ならで過ぎせ給はんよりも、忍びて出させ給ひなば、中々めやすくぞおはしぬべき。難面方の御おもむけも、今はかくとこそ見はて侍れ。大君の御いそぎの折節とても、おほよそにかけはなれて、其悦びにだにおはせざりし。たゞ角ながらいふかひなくて、かゝづらひ給はんとても、たけき行末ならんとは、中々かけても思ひ給はぬ。主斗頭が住よしの君をおかし奉らんとせしやうに、うるさききにはあはてまどはんより、何斗の恥なき此方に思した、ましかば、よろしくこそ」と聞え奉れば(下略)。

(411～412・二〇六～二〇七頁)

杉子は姫君に、突如訪れの途絶えてしまった「難面(つれなき)方の御おもむけ」はよくわかりました、これ以上は期待できないと「見はて」ましたと告げる。これまで男君の真心を信じようとしてきたが、もはやあてにはできないと思ったというのである。これを受けて姫君も「まろもしかなん思ひとりし」(412・二〇七頁)と同意する。男君の心変わり、継母による迫害への恐れ、そういうい

た状況を考えあわせながらも迷っていた姫君だが、ついに志賀への移住を決意する。まだ夜も明けぬほどに御車に乗り、住み慣れた場所を去っていく際の姫君の心中をみておきたい。

女君の御心の中は、現としもえわきまへ給はず。たゞ大かたの人のつらさに、か斗も思ほし立にし道なれど、いとかく跡はかなくて、さる浦里にながらふる共、待事あらん身ならましかば、夫をたのみにてもたへぬべきを、契し事もなき身にて、尋る人も有兒に、何しに角は立出ししぞと、御心も暮まどひて（下略）。

(417・二二〇～二二二頁)

姫君は、悲しみと嘆きのなかで現実の出来事とも思えない状態にあるという。見過ごせないのは、出ていくのは「大かたの人のつらさ」ゆえ、という箇所である。この「人」とは誰か。『中世王朝物語全集』が「男君」と解釈しており、従うべきだろう。というのも、彼女が抱く「つらし」という思いはすべて男君に関わるものだからである。

① うとまるゝつらさを人に恨てもいふかひなきは我身成けり

(401・一九八頁)

② いとかく浅ましき人の心を、つらしとうんじ給へる名残に、又かやう成夢を見給ふに、中々思ひさましがたく、此まゝ、母の御もてなしも、如何様にかはと、かた／＼にいけるかひなく思ひまどひて（下略）。

(408・二〇四頁)

③ 女きみ、年比つらしと思しこめたる御心に、たいめんせんとも思されず、奥のかたにかくれ給ひぬ。

(453・二四三頁)

それぞれ確認しておくと、「うとまるゝつらさを人に恨ても……」

(用例①)は、男君から一切の音信が絶たれたのをうけて、姫君が詠んだ歌である。こうした思いは歌以外にも、「いとかく浅ましき人の心を、つらし」(用例②)というように見いだせる。「浅ましき」男君の「心」に対して「つらし」と苦しんでいたところへ、父君の死という信じがたい出来事が起きた、となるとその後の継母の言動も気がかりだというように、男君の途絶え・父君の死・継母への不安と苦悩が積み重なっていくものとして語られている。姫君をまず苦悩させているのは男君であることがわかる。それを如実に示すのが、志賀で姫君と男君とが再会する場面だろう。「年比つらしと思しこめたる」(用例③)相手だからこそ、姫君は男君に会いたいとは思わなかったという。このように、姫君がひたすら「つらし」という思いを味わわねばならなかった人物とは男君であり、志賀行きを促した主たる要因であったと言える。つまるところ姫君が恐れおびえた、「御心さがな」き継母による「つらきめ」は描かれず、かわって描き出されるのは、男君の「心」によって「つらし」と苦悩する姫君の姿なのである。

男君の「心」の問題は、男君自身にも言及されている。姫君は実妹ではなかったと彼が理解する場面である。次に示すのは、垣間見ることににより、実妹と姫君を取り間違えていたことに気づいた男君の困惑と後悔の場面である。

げにいつならん、おなじさまにて見え給ひし、今独にぞおはしましけんを、心あさき女ばうの思ひまがへて疑しにこそ。もし、さもなどある事成らば、かく斗たえはて聞えて、はかなきせうそをだに申さざりしかば、いか斗かうらみ給はん。

心より外のなをざりながら、ひとのさまたげし事にもあらず、我心にてためらひにけるわざなれば、身のとがと思しなされて（下略）。

(431・432・二二六・二二七頁)

男君は、この一件は自分の本意ではなかったとしながらも、「我心にてためらひにけるわざ」と噂を真に受けてしまった自身を責める。軽率な噂をしていた女房たちではなく、あくまで自分の問題として受け止めるのである。同様の感慨は、乳母を呼んで事のあらましを聞き出し、姫君が失踪していることを知ったあとにも見られる。

はかなき事を聞いて、深き心をも思ひめぐらさず、引きりたる様にかき絶にしを、いかにつらしと思しけん。（略）人めのせきにへだてられ、又は隙なきおやのいさめによりて、わりなかるんなかをしも、ひきはなれんこそ常の事ならめ。たがさかしらをなすとはなくて、たゞかり初めのしりう事ゆへ、我心からなりし事なれば、たれにとがをばゆづり聞えんと、わかかへり思しなから（下略）。

(433・二二八頁)

自分が一切の音信を絶ったのを姫君は「いかにつらしと思」ったであろうか、この出来事は他の誰のせいでもない、「我心からなりし事」と悔やむ男君である。その後、男君は志賀にいる姫君と偶然の再会を果たす。彼の釈明を聞いた姫君の反応を見ておこう。

さすがに、かゝる世をもいとはで、はかなきとし月を、さてながらへしも、誰故にかと思しなすには、むげにかけはなるべうも思されねど、さ斗の事に付ても、あさはかに絶給ひにけるすが／＼數御心に、又いかさまの行末にかと、思したど

られずもあらざりければ、かうてもへぬる年月を、又人わろくてさそらはんよりと、人のみ心の頼みがたげなるを、おぼし煩ふさまなれば（下略）。

(454・二四四頁)

対面を拒み、杉子を介して当時の事情を聞いた姫君は、さすがに誰のために出家もせずに生き長らえていたのか、とむげにはできない気持ちになる。だが、彼女は今後の「行末」への不安を募らせ、やはり対面できないでいる。それは「人のみ心の頼みがたげなる」とあるように、心から信頼することのできない男君の「すが／＼數御心」ゆえである。この時は、女房たちの「わか／＼し」（454・二四四頁）という非難の声に押され、姫君は対面を果たすことになるが、このちも男君への不信任感をぬぐえない。次に挙げるのは、志賀の地から男君のいる山科邸へと移った姫君の心中思惟である。

女は、彼あくがれ出し昔の事を思しつゞけて、げに、夢のやう成し世をも見しかな。夫も猶うきよなれば、さして心もおどろかねど、いとかくあやしげにて、相聞えにける事。すべてひたむきに、かたよせきこゆべき事かは。うきおりふしに向ひては、命をさへいたづらに捨や果ましと思し聞こえし事と（下略）。

(460・二四九頁)

彼女は、志賀に移住した当時、命までも捨ててしまおうと決意するほど辛い思いを味わったことを思い起こし、こうして迎え取られた今であっても、男君に対して「すべてひたむきに、かたよせきこゆべき事かは」と思うのである。全幅の信頼を男君に寄せるわけにはいかない、というこの思いを、彼女は今後も抱き続け

るのか、それともやがては考えを変えるのか、この場面を最後に、姫君の男君に対する胸の内が描出されることはない。物語はただ、二人が「なぞへなく」「いとあらまほしう」「御なからひ」(466・二五三頁)という理想的な夫婦であることを語り賞賛するのみである。

三、「吹まよふ風の心」の和歌

以上述べてきたように、この物語は進むにつれて、「浅ましき人の心」「すが／敷御心」「人のみ心の頼みがたげなる」といった、男君の非難されるべき「心」のありようを照らし出していく。男君が突如訪れなくなったために、姫君は苦しみ嘆く日々を送ることになるのだが、しかし、これは男君の側にも事情があった。彼は白露の姫君を実妹だと誤解したからこそ、やむにやまれぬ思いの中で彼女との関わりを絶とうとしたのであった。よってこの出来事のみをとりあげて、男君の「心」について言及するわけにはいかないだろう。実は、この出来事以前にも、男君の「心」に関して看過したい場面がある。男君と姫君が初めて夜を過ごしたその翌朝の場面へと遡りたい。

うへに、若かうやうのかたはしをだにほのめかす人もあらんに、いか斗つらきめを見んと、さしもあるまじき事さへ取あつめ思いつづけて、物の隙／＼よりさし入朝日影だに、なまはしたなり、空おそろしき心ちし給ふに、いとやましうて、おき出ん共おぼされず。(略)此君さやうに思して、誠に永かちむ世まで物し給はゞ、たづきなき御身のためものしく

やと、思ひなぐさめしを、けさの御文さへまいらざ。其日の暮れつかたも心して下まぢゐたれどさるけしき成御音信もあらざりければ、いと心やましう、いかにありける事ならんと、心一つに嘆きつ、(下略)。

(376・一七八―一七九頁)

姫君は、継母が聞いたなら「いか斗つらきめを見ん」と「空おそろしき心ち」になり、日が高くなっても臥したままである。杉子もまた、誰かに事情を知られていないかと不安になり、実母が生きていたらと思う。一方で、男君との関係が「誠に永からむ世まで」続くのなら姫君にとって頼もしいことであると、自分自身に言い聞かせ慰めている点に注目したい。継母の迫害という事態を懸念する中で、男君の存在に期待しうとする思いがうかがえる。だが、そうした期待を裏切るかのように、男君からは「けさの御文さへまいらず」、その日の夜も「さるけしき成御音信(おとづれ)」もなかった。男君は後朝の文もよこさず、早くも二日目にしてふつりと連絡を絶つのである。

気が気でない杉子は「いはけなき御あいしらひもこそ」(377・一七九頁)と、姫君が幼いゆえに何か不快な思いをさせたのではないかと推測する。これ以後は、その幼さを見つけ出していくような杉子のまなざしのもとで姫君の様子が語られる。「むげに心ぼそき御分野(ありさま)かな」(377・一七九頁)、「かく世なれぬ御心のくせ」(378・一七九頁)、「むげにおさなう御座す哉(同)」と、姫君のいたらなき・幼さが強調され、男君の再訪がない理由として受け止められていくのだが、実際のところなぜ男君が訪れなかつ

たのか、物語は明瞭に語らない。

確かに、忍び込んだ夜に男君が思いを訴える場面では、状況のみこむことのできない女君の様子が「むげにいはいはけたる御様」(371・一七四頁)と語られているが、男君がこれに対して不満を抱いた描写は見いだせない。顔をひた隠しにする女君に対して、他人行儀な態度をとらないでほしいと嘆く姿も描かれるが、それも「断(ことわり)」(375・一七七頁)と共感しているものであり、「たゞ哀に心ふかきさまのかねごと」(同)をささやきながら彼女のもとを出ていく男君の姿からは、二日目の夜は訪れまいと思うほどの不快な感情は読み取りがたい。むしろ彼は姫君への愛情をにじませながら、彼女に次のように告げていたのである。

「うちつけ成様に、心ゆかず思しぬべかめれど、今より角てめなれ奉らば、さりとともか斗は思しうとまじ。世にたぐひなき心のしるしは、今見はてさせ給へよ。」(374・一七六頁)

あなたを深く思う「世にたぐひなき心」の証を「見はて」てもらおう、このように言い置きながら、先に確認したように、男君は一切連絡をよこさなかったことになる。なぜ訪れなかったのだろうか。彼の立場からは次のような叙述がある。

侍従の君は、昨日だにおこたり給へる事を、如何思さるらんと、いとおしさに、又の日つとめて奉れ給へり。

(379・一八〇頁)

誰かに引き留められたり、物忌みがあつたというのではなく、あくまで男君の「おこたり」であつたという。そうしておいて姫君はどう思ったかと気の毒になり、男君は「又の日」すなわち三日

目の早朝に手紙を出している。手紙には、「心まどひ」のため、そしてまた「つゝまじきすぢ」といった遠慮される方面のことが氣にかつたために訪れることができなかった旨が記されているが(379・一八〇頁)、姫君からの返事を受け取った男君の心中思惟ではそうした事柄が具体的問題にはされていない。

君はいと／＼おしう、我がなをざり思ひしられて、今夜は参るべく思しおこせど、猶いとわづはらしう、まぎるべきかたもあらぬを、いかにせましとおもほし廻らすも、中々恋化給ふべし。

(380・三八二頁)

彼は訪れなかった「我がなをざり」を思い知つたという。姫君からの文を読み、三日目の今夜は行くことを決める男君だが、そのすぐそばから「猶いとわづらはしう」とためらい、思いを巡らし、そうするうちにかえつて姫君を「恋ひわび」という状態に陥っていく。結局、男君が後朝の文を贈らず、二日目の夜に訪れなかった理由は、男君の「おこたり」「なをざり」という表現で示されるだけなのである。それでいて、ようやく姫君のもとを訪れた男君は、次のように語らう。

「今夜だにいと冷しう、よからぬさまに聞えなすべき人もこそと憚からるれば、まして、程／＼、かうやうにても参り通ひなん事のかたからんを、心のおこたりに思ほしなすな。折々にても、事なくて行末ながくみ馴奉らば、夫に付ても心のやるかた成べければ」など、まめやかに宣ふを、「およずけても見えさせ給へる御さまかな。いますこし世慣れたる御心ばへにて、ならび給はゞ、いかに云かひおはせましを。いで

や」など、呟き聞こゆ。

(382・一八三頁)

こうして通ってくることは難しいため、訪れがなかったとしても「心のおこたり」と思わないでください、という男君の言葉は、先ほどの「我がなをざり」「おこたり」といった表現を思い起こしたとき、素直には受け止めたものとなってくる。傍らで耳を傾けていた女房達は、「いままじ世慣れたる御心ばへにて、ならび給はゞ」と姫君の幼さに言及しており、彼女たちは訪れがなかったとしても、それは姫君の資質によるのだと捉えているふしがある。さきほどの杉子の反応と近いものがあるだろう。こうした叙述の流れのなかで、男君もまた姫君の幼さに物足りなさを感じる姿が示されることによって(384・一八四頁、二日目の無沙汰はあくまで姫君の側に原因があることになり、男君の「心」のありようが問題としてはつきりとは浮かび上がらない形となっている。だが、次の歌に注目したとき、「心」の問題が確かに照らし出されるのである。

吹まよふ風の心もしら露はむすびもあへず消や果べき

(389・一八九頁)

思いもよらぬ形で男君と関係をもつてからひと月が経ち、男君にも慣れてきた姫君が、来し方行く末に思いを馳せ、男君の歌に返す形で初めて詠んだ歌である。「吹まよふ風の心」とは男君の「心」であり、その心を「しら」ず、わからず、理解できずにいる「しら露」とは、女君である。この歌は、姫君の呼称と作品名の由来となる歌として重要であるだけでなく、これまでの出来事から見出せるような、男君の「心」への懸念を詠み込んだものとなっている。

る点において看過しがたいものがある。姫君がどれほどの思いを込めて詠んだのか定かではないものの、この歌は、「吹まよふ」あてにならない男君の「心」と、それに翻弄される「しら露」の姫君という二人の関係を如実に示しており、この物語全体を貫く一つの主題を示すものとして位置づけられると考えられるのである。

この歌はその後もう一度だけ登場する。

たがさかしらをなすとはなくて、たゞかり初のしりう言ゆへ、我心からなりし事なれば、たれにとがをばゆづり聞えんと、わかかへり思しながら、(略)思しかへせど、さすがになのめにも思し初ざりし御心ざしは、さもひたぶるに忘れもやられず。人の恨のはるけがたきは、後の世までのほだしならんと、いとせんかたなく思しなすにぞ、彼きぬへに「消やはつべき」と思し疑し御口すさびなど、哀に思し出られ給て(下略)。

(432・二三八頁)

姫君が実妹だというのは誤解であり、なおかつ姫君は失踪してしまっていることを知った男君が、その原因は「我心」にあると悔いながら、在りし日の姫君の姿を思い起こす場面である。男君は、彼女が「消やはつべき」と歌を詠み、自分を「思し疑し」様子であったことを振り返る。このように「吹まよふ風の心もしら露は結びもあへず消や果べき」の歌は、再び取り上げられることで、男君の「心」ゆえに「消や果べき」運命をたどる「しら露」の姫君、という歌意をもつものとして解釈しうる。改めてこの歌が物語の一つの主題を示唆するものであることがうかがえよう。むしろ、この場合の男君の「心」は、二日目の無沙汰の時に見られた「心」と

はやや内実を異にしている。しかし、不可解なあるいは浅はかな男君の「心」によって姫君が苦悩するという点で、無沙汰と誤解という二つの出来事はこの一首の歌でもって結び付くのである。

『白露』は、継母に対する不安や恐れをくり返し抱き、はたまた実妹と結ばれてしまったと幾度も嘆く登場人物たちの姿を描き出し、先行する作品を幾重にも織り込んでいく。その一方で、「心」の問題を取り上げていくのである。興味深いのは、男君の「心」の問題は他の女君たちとの関わりのなかで生じたものではないという点である。複数の女性をめぐる男の「心」ではなく、一対一の関係での「心」に焦点が当てられている。これは単なる男女関係における男君の姿という問題にとどまらず、一人の人間の「心」の問題へと繋がりのあるものをはらんでいるのではないかと考える。それにしても「吹まよふ風の心」とはいかなるものか。これまで述べてきたように「心のおこたり」「なをさり」「すが／＼敷心」といった表現で捉え返されるものの、その内実は定かではない。この物語がそうした「心」を取り上げるに至った背景とあわせて、今後の検討が求められよう。

おわりに

『日本古典文学大辞典』^③「しら露」の項において中野幸一氏は次のように述べている。

主題は中納言の子息侍従と白露の姫君との悲恋物語であるが、最後に幸福となる構想は、他の擬古物語によく見られる救いのない悲恋通世の物語とは異なる。

ここで言う「救いのない悲恋通世の物語」とは、「女の栄華／男の嘆き（その延長線上の通世）」^④を最終的に描くという点で特徴づけられるような中世物語群を指しているのだろう。確かにそうした作品を念頭に置いたとき、『白露』は男女二人があわせて「最後に幸福となる構想」を持った物語だと言える。だが、「吹まよふ風の心」の男君に翻弄された姫君が、再会を果たしたあとになっても、男君をこれからも完全に信頼することはできないだろうと思う姿が描かれていることを見逃してはなるまい。

この物語は、冒頭で紹介したように、北村久助のちの季吟によって書写されているという。識語には「為嫁女書之送者也」とあり、彼が「嫁女」のためにこの物語を書き写し、贈ったことがわかる。「嫁女」は季吟の妻であるとも、他家へ嫁ぐ知り合いの女性であるとも言われている。一六歳の久助はこの物語を嫁入り本として書写し渡したのだろう。では当の「嫁女」はこの物語をどのように受け止めたのだろうか。今となっては想像するよりほかにない。

注

(1) 柴田光彦・中野幸一『「しら露」解題』（『早稲田大学図書館紀要』八、一九六七・九）。

(2) 中野幸一「新出の『白露物語』について」（『物語文学論攷』へ教育出版センター、一九七一・一〇）所収。初出は、『国文学』二二・一二、一九六七・一〇）は、引歌に注目して「二二七八年以降」の成立とする。田村俊介「解説」（『中世王朝物語』『白

『露』詳注』(笠間書院、二〇〇六・一)は『河海抄』を踏まえた表現があるとし、『河海抄』成立の「一三六二年以降」の成立とする。両者とも、御伽草子と『しら露』には隔たりがあることから、室町期(中野氏)あるいは室町中期(田村氏)までは下るまい、とする。『鎌倉時代物語集成』(市古貞次・三角洋一編、笠間書院、一九九一・四)は、『鎌倉後期・南北朝の成立』と記載する。

(3) 前掲注(2) 中野幸一論文。

(4) 片岡利博『『白露物語』の基礎的研究——早稲田本の成立年代をめぐって——』(『文林』三一、一九九七・三)。

(5) 松本みずき『鎌倉時代物語『白露』の研究——先行物語からの影響について』(『皇學館論叢』二八・六、一九九五・一二)や、辻本裕成『王朝末期物語における源氏物語の影響箇所一覽』(『国文学研究資料館文献資料部 調査研究報告』一七、一九九六・三)など。

(6) 片岡利博『解題』(『中世王朝物語全集一〇』しのびねしら露』(笠間書院、一九九六・二七六頁))。

(7) 前掲注(2) 中野幸一論文(三三三頁)。

(8) 細野はるみ『しら露』(『国文学解釈と鑑賞』四六・一一、一九八一・一一、一三三頁)。

(9) むろん、継母の姫君に対する風当たりの強さが語られていないわけではない。嘆き明かす姫君を大君が心配して付き添うことに對して、「安からず」(399・一九六頁) 思い制している継母の姿や、姫君の父の死後、継母が今は俗世間から

身をひいた状態にあるものの、姫君を「いとどめざましき様に、めをそばめ」(410・二〇五頁)、「たやすからず思はげみて、折々はしたなきけしきも」す(410・二〇六頁)姿は見られる。

(10) 本文の引用は、中野幸一翻刻『早稲田大学図書館蔵『しら露』』(前掲注(2)『物語文学論攷』所収。初出は、『早稲田大学図書館紀要』八、一九六七・九)に拠る。カタカナのルビも本文に拠るものである。括弧内に頁数を算用数字で示した。なお漢数字で、参照として前掲注(6)『中世王朝物語全集』の『白露』の頁数も並記した。

(11) 中島正二『『白露』の趣向』(前掲注(2)『中世王朝物語『白露』詳注』(三三三頁)所収。初出は、『むろまち』一、一九九二・一二)。

(12) 男君が彼女の心中を思いやる際にも、「はかなき事を聞いて、深き心をも思ひめぐらず、引きりたる様にかき絶にしを、いかにつらしと思しけん」(433・二二八頁)というように、「つらし」という表現が出てくる。

(13) このように深く後悔する男君は、そののちも「我心からのおこたり」(441・二三四頁)と自責の念に駆られる一方で、「心にもあらぬねれ衣」(441・二三四頁)とも思うようになる。最後には大君に対して「さるいみじき物思をし、人のうらみをもおひ聞えけるは、此ためにこそ」(470・二五六頁)と責任の所在をずらしており、男君の人物造型を考えるうえで興味深い。

- (14) 「今夜だにぐまして」が男君のセリフから外されているが、これは含めてよいと考える。また『中世王朝物語全集』の訳文では「今夜」が「二日目の今夜」となっているが、これは「三日目」が正しいと考える。
- (15) 以前に、姫君は「あしわかのうらみ初てし衣手を哀いく夜の波にしほらん」(380・一八一頁)という歌を贈っているが、これは杉子に「教へ」られて詠んだものである。
- (16) 『日本古典文学大辞典』三(岩波書店、一九八四・四、四四二頁)
- (17) 鈴木泰恵「中世の物語批評——『とりかへばや』『無名草子』から」(『中世王朝物語・御伽草子事典』勉誠出版、二〇〇二・五、八〇頁)。
- (18) 前掲注(2) 中野幸一論文。
- (19) 前掲注(4) 片岡利博論文。

(東北大学大学院文学研究科助教)